

令和 6 年度 卒業生アンケートに関する
相互評価による指導・助言の為の
自己評価報告書

令和 7(2025)年 8 月

別府大学短期大学部

別府大学・別府大学短期大学部 IR センター

◆卒業生アンケートの活用(本学での正式名称は「卒業時における学修成果達成度調査報告書」)の活用

1. 事実の説明及び自己評価

【視点① 卒業予定者対象のアンケートの実施について】

(1) 対象と実施期間

3月卒業生:令和7年 1月6日～3月19日

(参照:報告書 p.2に掲載)

学科内訳

食物栄養科 39名

初等教育科 190名

専攻科 10名 計 239名

(参照:報告書 p.6に掲載)

(2) 調査内容

ディプロマ・ポリシーで設定されている項目に基づいて、目標がどの程度達成できたかについて下記の内容で実施した。

1. 教養に関する質問(人間性の形成に資する幅広い知識・技能)9項目
2. 専門力に関する質問(専門に関する基本的な知識・技能)2項目
3. 汎用力に関する質問(社会で活用できる汎用性のある能力)8項目
4. 大学全体の振り返りと大学・後輩への意見

回答方法は、e-learning システム(Moodle)を用いて、学生自身がどのような主観的達成度を感じているかについて 5段階評価で回答してもらった。

(参照:報告書 p.2に掲載、各学科のディプロマ・ポリシー)

(3) 回答状況

回答数 235/239名

回答率 98%

(参照:報告書 P4に記載)

【視点② IR 業務を担当する者による分析】

分析については、各設問は Tableau を用いて集計し、自由記述についてはマイニングツールによるワードクラウドを作成した。これらの結果をもとに IR センターで分析を行い、報告書 P6～P9に取りまとめた。

回答率が 98%と本学の目標の 95%を超えており、改革総合支援事業「タイプ 1」の「卒業時アンケート調査の実施・公表」における3点を取れる条件を満たしている。また卒業年次生に対する学修成果達成度調査結果の分析として、各質問において、「かなり身についた」(5点)、～「ほとんど身につかなかった」(1点)としたときの回答全体の平均点および回答分布から卒業年次生の学修成果達成度を確認した。各質問は DP と対応しており、調査結果を DP 達成度の観点から分析した。

分析結果まとめ

(1) 教養(人間性の形成に資する幅広い知識・技能)

DP1(1) 基礎的素養:肯定的評価が87%。

DP1(2) 教養(人間・自然・文化理解):肯定的評価が84%。

DP1(3) 情報・外国語リテラシー:改善傾向だが64%と相対的に低め。

DP1(4) 健康リテラシー:肯定的評価が87%。高水準。

(2) 専門力(専門に関する基本的知識・技能)

DP2(専門分野の知識・技術):肯定的評価 95%と極めて高水準。就職状況も堅調で達成は良好。

(3) 汎用力(社会で活躍できる能力)

DP3(1) 思考力:施策効果が定着し、肯定的評価が87%。

DP3(2) 実行力(リーダーシップ・協調性):肯定的評価が84%。

DP3(3) 表現力(文章・口頭表現、コミュニケーション):肯定的評価が86%。

DP3(4) 情報力(国内外への関心、情報収集力):肯定的評価が76%。相対的に低めだが概ね良好。

(4) 学生の自由記述からの傾向

力を入れたこと:学業が1位で例年通り、学業重視の姿勢が継続している。

成長実感:専門知識・技術の向上、主体性・リーダーシップの発揮、自己管理・コミュニケーション力で向上実感が得られたようである。

大学・学科への期待:教育内容や施設・設備の充実を求める声が多い。

後輩へのメッセージ:大学での経験を通じた成長を伝え、後輩の活躍を期待する声が多数あった。

(5) 総合評価

教養・専門力・汎用力はいずれも昨年を上回り、全体的に高い水準を維持。

特に専門力(95%)、基礎的素養・健康リテラシー・思考力(いずれも87%前後)は極めて良好。

一方で、情報・外国語リテラシー(64%)や情報力(76%)は相対的に低めで、今後の強化が課題。

学生は学業を中心に主体的な学びを継続しており、本学の教育目標は概ね達成されている。

(参照:報告書 P3～40)

【視点③ 卒業生アンケート分析結果のフィードバック】

(1) 教員への分析結果のフィードバック状況

教員への分析結果のフィードバックについては、卒業年次生に対する学修成果達成度調査報告書を教授会で報告される。

(参照:報告書に掲載なし)

(2) 各学科からの改善状況報告

各学科長より総合評価及び教育改善が作成され、学修成果(到達目標)達成度評価報告書を企画運営会議、教授会で報告される。

(3)学生へのフィードバック状況

- ・「卒業年次生に対する学修成果達成度調査報告書」を HP に掲載し、公表した。

2. 改善・向上方策(将来計画)

- (1) 教養「情報・外国語リテラシー」、汎用力「情報力(国内外への関心、情報収集力)」達成度の向上に向けた取り組み
- (2) 自由記述からの意見の検討・改善

3. 関連資料

- (1)卒業年次生に対する学修成果達成度調査報告書
- (2)各学科のディプロマ・ポリシー
- (2)アセスメントポリシー

令和 6 年度 卒業生アンケートに関する
相互評価による指導・助言の為の
相互評価報告書

令和 7 (2025) 年 9 月

自己評価大学：別府大学短期大学部
相互評価大学：長崎短期大学

【相互評価報告】**1. 総評**

アセスメントポリシーに基づき卒業年次生を対象として、DP 達成度を Web アンケートにより実施している。令和 6 年度は 95%の回答率を目指したところ 98%の回答率となった。対象学生にアンケートの趣旨が浸透した結果が要因であると思われる。

アンケート結果は、肯定的評価が多く、特に DP2 の専門分野の知識・技術が高い値を示した。また、設問が DP と対応しているため回答結果を DP 達成度として扱える利点がある。学生は 5 段階（かなり身についた（5 点）～ほとんど身につかなかった（1 点））で回答しているが、ループリック形式とするのも一つのアイデアである。

学生・教員に対するフィードバックは確実に行われており、改革・改善のサイクルが機能しているといえる。

2. 視点ごとの評価**視点① 学生による卒業生アンケートの実施**

卒業生アンケートとして、アセスメントポリシーに基づき「卒業年次生に対する学修成果達成度調査」を実施し、令和 6 年度は 98%という高い回答率を得ている。

調査内容は、DP に関する事項 19 問（DP1：9 問、DP2：2 問、DP3：8 問）、大学全体の振り返りと大学・後輩への意見に関する事項 7 問で構成され 5 段階評価としている。DP に対する質問は DP と対応しているため回答結果を DP 達成度として扱える利点がある。質問数は適度であり、質問内容も学生が回答しやすいように工夫されている。

調査方法は、e-learning システム（Moodle）を用い、令和 7 年 1 月 6 日から 3 月 19 日にかけて行われている。回答は時と場所を選ばない方式であり学生負担が軽減されている。また、回答期間は 2 カ月以上あり学生への周知、回答依頼、督促等を行う時間的余裕が確保されている。

視点② IR 業務を担当する者による分析

集計は Tableau を用いて行い、自由記述はマイニングツールによるワードクラウドを作成している。全体の回答者数を棒グラフで、学科別の回答を帯グラフで表示し設問ごとに分析を行っている。

肯定的評価が高い傾向にあるが、DP1 の情報・外国語リテラシー及び DP3 の情報力は相対的に低い値を示した。一方、DP2 の専門分野の知識・技術は突出して高い値を示しており、専門知識を生かした就職が堅調であったこととの関連が示唆された。

視点③ 卒業生アンケート分析結果のフィードバック

教員へのフィードバックは調査結果報告書（令和 7 年 7 月）により行っている。各学科からの改善状況報告は、学科長が作成する総合評価及び教育改善による。

学生へのフィードバックは調査報告書をホームページに公開することによって行っている。

自己評価大学：別府大学短期大学部 相互評価大学：長崎短期大学

上記のとおり、評価しましたので、報告します。

令和7年9月19日

評価者：長崎短期大学 学生支援課長 氏名 新井浩之